

の考察を試みた。即ち40~60才代が82%を占め、男性が55%で、主訴は嘔吐51%, 上腹部痛45%であった。レ線所見では陰影欠損が39%, 球部の変形又は拡張が36%にみられた。診断適中率は38%であり、27%が十二指腸潰瘍と誤診された。最近十年間に手術総数29例の70%が根治術をうけ、その70%が臍頭十二指腸切除をうけた。

#### 5. 巨大なる腸間膜肉腫の一治験例

神谷定茂

今回、腸間膜肉腫の中でも、最もまれな平滑筋肉腫の一治験例を経験したので報告する。患者は、48才男性で、腹部膨満を主訴として来院し、腹部に、小児頭大の腫瘤を触れ、貧血強く、X線像で、胃、小腸の圧排像が見られた。開腹すると、腫瘍は、横行結腸、小腸に硬く浸潤する腸間膜腫瘍で、回腸、横行結腸と共に腫瘍を剔出した。腫瘍の大きさは2.5×7.5×7cmであった。文献的に考察すると、腸間膜腫瘍の本邦報告例は、242例で、良性は177例、悪性は65例であった。性別発生頻度では、良性は10才台に多く、悪性は40~60才台に多い、主訴は、良性では、イレウス様症状多く、悪性では、腫瘤触知が多い。腸間膜悪性腫瘍の術前診断率は悪く14%で、発生部位は、小腸腸間膜が65%を占め、組織学的に見ると、淋巴肉腫7例で最も多く、以下、淋巴肉腫症、細網肉腫、紡錘形細胞肉腫の順で、平滑筋肉腫はわずかに1例のみであった。

#### 6. 脳水腫を合併せる先天性右側偏側前頭頭頂側頭葉欠損症—いわゆる Hydrocephalodysplasia の一例

竹島 徹, 牧野博安

患者は9カ月男子で巨頭を主訴として入院。正期産吸引分娩で産時体重3100g。生後風邪に罹患し易かった。母親に知能障害を認めるが、血族結婚無く、第1子である。出産時より頭部膨大を来し、通常の体重増加が見られず、嘔吐をしばしば起した。痙攣、片麻痺は無い。4カ月時体重4450g、頭囲46cm。9カ月時全身状態良好なるも、体重6.3kgで首も坐らず発育の遅延を認める。頭囲48.5cm 大泉門5×6cm 開存。頭蓋皮静脈は怒張し、軽度の視神経萎縮あり。subdural hygromaを疑い開頭するに、右前頭頭頂側頭葉が欠損し、中大脳動脈は液中に浮く。術後、頭蓋透光性試験で欠損部の透光性増大を、大泉門右縁からクモ膜下腔へ50ccの空気注入で、欠損部の空気充盈像を、脳波により右側明確なるsilent waveを確認し、本症は、表題に記す疾患名で、

欠損部に髄液が貯溜せるものと確認した。

#### 7. 小児外傷性硬膜外血腫に続発せる大量出血を伴った十二指腸潰瘍の一治験例

守田博之, 牧野博安

重篤な脳損傷あるいは脳手術後におこる神経系の障害を原因とする上部消化管の急性の消化性潰瘍は1932年Cushingが最初に報告して以来Cushing's Ulcerと呼ばれている。本邦報告例は128例である。1例を経験したので報告した。

症例、6才♂、頭部外傷(左急性硬膜外血腫)にて昭和42年9月24日当科へ入院。ただちに左前側頭頂開頭術施行。術後経験良好なるも第8病日より大下血出現。胃瘻造設はじめ止血剤投与など行なうも止血出来ず。ヘマトクット7.5%, 赤血球85万と極度の貧血となる。第11病日にCushing's Ulcerの診断のもとに開腹。十二指腸潰瘍及び同穿孔を認めたので、迷走神経幹切断術及び幽門形成術兼栄養用胃瘻造設術施行、下血も止り全身状態も非常に改善さる。第12病日より胃瘻からのtube栄養開始、受傷後約9週間たった12月1日頃より意識回復し会話をなす。現在意識清明にして近く退院予定。

#### 8. 特異なる経過をたどった小腸肉腫の一治験例

渡辺一男

当教室に於て、最近腸管内腔と瘻孔形成をみた空腸平滑筋肉腫の1治験例を得たので、報告し、合せて小腸平滑筋肉腫の発育様式の特徴、ならびにX線像の特徴などにつき若干の文献的考察を加えて報告した。

[症例] 63才男性、家族歴: 特記することなし。既往歴: 5年前喉頭癌で喉頭全別出兼頸部廓清術。現病歴: 10日前より臍周囲部痛、2日前より発熱。一般接査: 白血球14600、便潜血(+)その他ほぼ正常。X線検査: 空腸内腔と瘻孔により交通した小児頭大の腫瘍内腔陰影存在。手術所見: 腹腔中央 Treiz 靱帯より40cmの部位より生じ管外性に腸間膜内に発育した1250grの腫瘤、空腸とともに剔出し端々吻合。組織標本: 平滑筋肉腫。転帰: 術後7カ月健在。[考按] 本症例は私の調べた限りでは、文献上、小腸平滑筋肉腫としては本邦で126例目。管外性発育83%。腸管との瘻孔形成23%。空腸のものでX線にて、腫瘍内腔陰影のうつつたもの13%。